

## 生きる上での糧「読書」

久しぶりに質問を受けました。私の専門の国語についてではありませんが、こういう質問も大歓迎です。

「朝読書の時に、ワークをやってはいけませんか。」

昨日の下校時に、一年のある生徒が私に話しかけてきました。落ち着いて答えてあげられなかった分、担任には「その子に納得できるように話してあげて」と言っておきました。その後、どうなったのでしょうか。後でその担任に確かめたいと思います。

現在二年生が国語で『走れメロス』に取り組んでいます。美しい友情を扱った話と思いきや、「本当にそうなのかな」と思える部分がある作品の中に結構あります。

自分の代わりに人質となった友人のセリヌンティウスの命を助けるために、メロスは走ったと一般的には解釈されています。だとすると、次の部分はどのように考えればよいのでしょうか。

「……信じられているから走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題ではないのだ。人の命も問題ではないのだ。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。……」

「メロスの頭は空っぽだ。何一つ考えていない。ただ、わけのわからぬ大きな力に引きずられて走った。」

間に合う、間に合わぬは問題ではない？（えっ、間に合わなかったらセリヌンティウスは殺されてしまうよ。）もっと恐ろしく大きいもののため走る？（えっ、人の命より恐ろしく大きいもの？そんなものある？）わけのわからぬ大きな力？（えっ、それは一体何？）

『走れメロス』を読み進めていくと、理解しがたいメロスの言葉や、語り手の語りがみつかります。ここが大切なのです。

この作品はフィクションです。作者太宰治おむむの作り話です。メロスの言葉も、語り手の語りも、作者が語らせています。作り話なら、理解できないことが出てきて当然です。それを突き止めようと思っても、答えは出てきません。（天国の太宰に尋ねるしかありません。）ただ、作者にはこの作品を作る必然性があったはず。先に挙げた理解しがたい部分が、まさにそれにあたります。

太宰治は、人生において「信じる」ということはどういうことかを真剣に突き止めたかったのだと思います。私たちは日常で簡単に「信じる」という言葉を口にします。中学時代は、それに思い悩むことも多いですよ。ね。「信じる」ことは、決して軽々しいものでありません。太宰は作品を通して、それを表現したかったのではないのでしょうか。話の中の「信実」という言葉がそれを物語っています。

読書は学習と違います。私たちが生きる上での糧になるものです。以前、「読書は異質性に触れること」「読書は内面の豊かさを育む手立て」と書きました。『走れメロス』を読んでいるときは、「信じる」ということについて向き合える時間です。短くても貴重なひとときだと言えますね。

（二月十六日記）